

【春の地貌季語の解説】

東日本 「逆さ寒」（さかさかん）

朝市の蚤の手元や逆さ寒

中村万亀

「房州の逆さ寒」という。安房では一月の寒中に当たる時期は温暖な陽気が続き、過ぎしやすい。ところが、寒明けの頃に寒くなる。これを寒が戻ったようだというのである。鴨川辺では今も古老が使う。

春先、暖かくなりかけた頃、寒さがぶり返す季節の言葉に「冴返る」がある。また「余寒」という、寒明けに残る寒さを表現することばもある。春先はしばしば寒気団が大陸から南下し、冬のような寒い日があり、季節の歩みが一定しない。

そのような寒暖のはげしさを表現するのに「逆さ寒」は鮮やかな言い方だ。前日と翌日との気温の変化ではなく、立春を挟み、暖かい寒中と寒明けの寒との陽気が逆だという。房州独特の風土を踏まえた地貌季語として面白い。

西日本 「赤雪」（あかいき）

赤雪や地球の芯の見え始む

佐藤文子

赤い雪が降るとは、起こりそうもない、あり得ないことをいう譬え。ところが赤い雪が降るのである。日本海側の各地や中央高地の信州や飛騨や五箇山地域では、春を告げる黄砂が盛んに降る。黄砂のため雪が赤褐色や黄色に染まり、積もった雪の表面が赤みを帯びる。秋田地域ではこれを「黄雪」といい、富山県の五箇山地域では「赤雪」という。赤雪を「あかいき」という方言が面白い。信州でもところによって「あかいき」と呼ぶ。古くは「赤雪雨れり。平地二寸」（『続日本紀』天平十四年正月）と陸奥国のこととして出ている。

出典：『ゆたかなる季語 こまやかな日本』宮坂 静生 著 岩波書店

『語りかける季語 ゆるやかな日本』宮坂 静生 著 岩波書店